

第五期 哲学カフェ（最終回）

5回 九月二十八日 二時から

△差別△ころ△からの

△自由△を

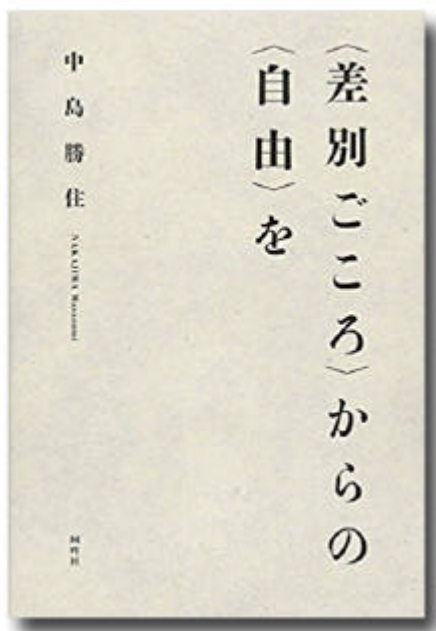
ゲスト 中島勝住さん

差別に関して明らかなのは、差別される側が初めから存在することは無いということです。差別される側は、差別する側が差別する対象を極めて恣意的に創り出すことによって初めて顕現します。つまり、差別という問題は、差別する側次第なのです。

この明らかさにもかかわらず、私たちは、差別される存在が、あたかも、いつでも差別されることを待っているもの、であるかのように考えている節があります。この浅薄な心性が、差別問題を考える際に大きな混乱をもたらしています。それは、「差別されても当然」といったものに代表されるでしょう。こうした差別する存在とその行為を覆い隠してしまうような無定見な勘違いがある限り、「差別問題の解決は国民

的課題」であると幾度となえても、解決には程遠いでしょう。

私たちにとって居心地の悪い自己認識、つまり、差別は私たちが起こしているのであって、その可能性は誰もが持っているのだという地点に立つ必要があると思います。ありきたりですが、差別問題は「ジブングト」なのです。逆に言えば、だからこそ、解決の可能性も大きいとも言えるでしょう。これがタイトルの意味するところです。



第四回 感想

学校唱歌とわたしたち

なつかしさとあやうさと

「資料」 蛍の光

歌詞：稲垣 千穎（いながき ちかひ）

一、蛍の光、窓の雪

書（ふみ）読む月日、重ねつつ。

いつしか年も、すぎの戸を、

開けてぞ今朝は、別れ行く。



二、止まるも行くも、限りとて、

互（かたみ）に思う、千萬（ちよろず）の

心の端（はし）を、一言に、

幸（さき）くと許（ばか）り、歌うなり。

三、筑紫の極み、陸（みち）の奥、

海山遠く、隔つとも、

その真心（まごころ）は、隔て無く、

一つに尽くせ、國の為。

四、千島の奥も、沖繩も、

八洲（やしま）の内の、護（まも）りなり、

至らん國に、勲（いさお）しく、

努めよ我が背、恙（つつが）無く。

【参加者のみなさんから】

- 「童謡は唱歌のアンチテーゼだといわれていますが、最後には北原白秋だって国家主義的なたたを作っていました」との中西さんのお話。大正デモクラシーの崩壊の過程をいみじくも童謡は象徴しているのだなと思いました。確かに、デモクラシーは大切にしなければならぬものだけでも、その体内に「あやうさ（パトリからナショナルへの）」を宿しているように思えます。仮に「令和デモクラシー」があるとすると、それをどう育てるのが問題になります。

- 学校唱歌について、全く知らなかったお話をたくさんお聞きできました。特に、ふるさとという歌が、人為的にネーランドの歌として作られたであろうというお話、今の福島でこの歌を歌うことの意味など、ゾクッと感じる恐ろしさがありま

した。しかし、共同の記憶を持つことが難しい現代の社会において、「同じ」歌をいっしょに歌う喜びの光と影をどう考えればよいのか。情動によって人が動かされることと共同性や公共性のゆくえんについて、そして「歌と逆に歌へ」ということの現代的な可能性について、難しい問いですが、あらためて考えなければとつくづく思わされました。

和歌にはあった地方色、郷土色が唱歌から消されているという指摘に驚きました。逆に、和歌の中にある歌枕（地名）にすごく興味をもちました。地方色といえば方言。各地の方言の持つユニークな響きは音楽性があって大切に残ってほしいと思いました。全国のみんなにつながる標準語と並存する」という構造で。蛍の光の3、4番の歌詞の国家主義的なメッセージにはショックを受けました。良い悪いは別にして、大和言葉の響きの力はすごく感じました。大和言葉を研究したいと思います。

● 「教育」「共同性」「愛国心」などなどの功罪について色々と考えてしまいました。自発的に自分個人だけで追求している間は無害なんでしょうが、「善意で他人に強要する」ことが発生すると急速に国家主義に煎じつめられていくその過程の速さにおののいてしまいます。最近そのスピードも加速の一方で…、マイノリティとしての息苦しさを感ずるこの頃です。

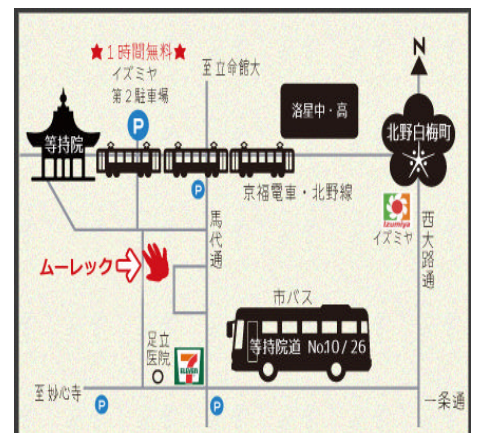
● 一定の故郷（ふるさと）はないが、兎追いし・小鮒釣りし・水は清き、もそのままの世界を見てきた私は、「故郷」や「蛍の光」にはいかれてしま

います。最近小学唱歌等習いたいなど思っています。勿論あやうさといふことはきいていますが、今日は具体的な話しがきくことができました。

今回参加するに当たり、運よく、図書館でゲストの著書を貸出でき、事前に目を通す機会を得たので、お話の内容が、とてもよく分り、興味深い時間が、あつという間に過ぎていきました。お話の中の「美意識の固定化」が、私の中の大きなキーワードであり、「情動作用のスタンダード化」も考えていきたい課題です。「無知は罪」という言葉を私に突き付けたこの一冊を、知人達にも薦めたいと思います。

後日の感想です。とても内容の濃いゲストのお話でした。日本の学校唱歌が、「なつかしさとあやうさ」というテーマの示す国民精神統合と国家主義的意図をもつことの検証と解説にとどまらず、日本文化や人間とは何かについて考えさせられました。日本人にとって唱歌のもつ「なつかしさ」とは何か？「故郷」とは何か？未来（への希望・不安）ではなく過去（の美しさ・依存）への心情への依存が意味するものは何か？さらに、「美しさや懐かしさ」という幻想は、人間生活の現実を見る目を遠ざけ、「依存にともなう危うさ」を生じさせるのではないかと感じました。

● 「蛍の光」の3、4番のこと、本当に知られていないのだな、というのが（残念だった、という思いを込めての）正直な感想です。現役の記者時代、「凡語」にも書いたし、中西さんに『唱歌の社会史』の連載もやってもらったのですが…。



J R 京都駅から 市バス（26）『等持院道』
市バス（205）『北野白梅町』
京阪三条駅から 市バス（10）『等持院道』
市バス（16）『北野白梅町』

中西さんのお話を驚きをもって耳を傾けている参加者の皆さん